2014 年度第 1 回外国語学部 FD セミナー講演要旨

報告：吉田信介

- 演題：「英語で教える」ために：教室でのコミュニケーションティップスと導入プロセスの事例紹介
- 講師：立命館大学 国際教育推進機構准教授　堀江未来先生

● なぜ「英語で教える」のか？

1990 年代には，交換留学生向けの授業として実施されていたが，2000 年代になると，英語による学部／大学院課程の設立が始まり，同時に外国人留学生の日本語学習時間と労力の軽減のために行われるようになった．最近では，「グローバル３０」にみられるように，　「グローバル人材育成」論が提唱され，日本人学生も対象に，グローバルな環境で（道具としての）英語を使って仕事ができる人材の育成，ならびに留学生とともに多文化環境で学び合うようになってきている．

● 代表的な賛成意見とは？

１）より広い対象者に対して授業を提供できる（留学生、国外での機会も含め）こと，２）学生の英語力や異文化コミュニケーション力の育成も期待できること，３）世界での研究学術交流にそのまま結びつけることができること，があげられる．

● 代表的な反対意見とは？

１）授業で伝えられる情報量が減るのではないか，２）準備に時間がかかるのではないか，３）日本語での学術の発展を阻害するのではないか，４）日本の大学では日本語を使うべきではないか，５）学生の前で（“学生より下手な”）英語を使いたくない，ことなどがあげられる．

● 教室英語（Classroom English）の特殊性とは？

「前の方に詰めてください」「出席をとります」「3 人のグループをつくってください」「解答用紙を裏にして、後ろから前に順に送ってください」など，普段使わない表現を用いる．また，学会発表は問題ないが，教室では躊躇す

るという教員のメンツの問題がある.

- 著書「大学教員のための教室英語（アルク, 2008）」とは？

英語の専門家ではなく、教授法や異文化間コミュニケーションの専門家グループが執筆．そこでは，授業として、効果的かつ効率の良いコミュニケーションをめざすには，１）学習内容や指示を的確に伝えること，２）学生の学習意欲を高める学習を促すことが指摘されている.

- 「英語で教える秘訣」５項目とは？

1. 秘訣１: 完璧な英語を目指さない : World Englishes の考え方，コミュニケーションツールとしての言語，非母語話者同士のコミュニケーション
2. 秘訣２ ： コースの全体像をしっかり設計 : シラバス活用，ルールを明確に，評価基準・課題の位置づけ，毎回の授業の流れ・トピック，教員と学生の期待される役割，英語力の位置づけ(評価の対象か否か)
3. 秘訣３: コミュニケーションの手段を増やす : 非言語面の工夫，一番後ろの学生に向かって声を投げる／腹式呼吸，ゆっくり目，トピックの区切りを示す「間」，Audience awareness，アイコンタクトやジェスチャー，多様な手段でポイントを繰り返す（板書、配布物、オンライン）
4. 秘訣４ ：学生の参加を促す : 講義型からアクティブラーニング／参加型へ（満足度，頭に残る情報量
5. 秘訣５ ： 学生の多様な英語力に配慮する : 国際社会のリアルな言語環境，多様な英語環境でのコミュニケーションのあり方を考える機会としての価値を強調，まずは教員が，「恥ずかしがらない」お手本を示す，英語が正しいかではなく「あなたの意見」に興味があるということを伝える.

以上